5. 特に、色彩および黒白陰影刺激に対する反応を主とした継列分析。

6. 幾人かの被験者に共通に見られる宗教的反応。

それぞれの項目の検討において、本被験者の特殊性を示す様な特徴が見られたが、その中でも、色彩および黒白陰影刺激に対する反応の仕方は最も注目すべきものであった。

文 献

- 1) Beck, S. J. *Rorschach's test II*. New York : Grune & Stratton, 1949, 37—41, 252—326.
- 2) Brosin, H. W., & Fromm, E. O. Rorschach and color blindness. *Rorsch. Res. Exch.*, 1940,

4, 39—70.

- 3) Klopfer, B. *Developments in the Rorschach technique*. Vol. I, New York : World Book Co., 1954.
- 4) Klopfer, B., & Kelley, D. M. *The Rorschach technique*. Yonkers : World Book Co., 1946.
- 5) Phillips, L., & Smith, J. G. *Rorschach interpretation : Advanced technique*. New York : Grune & Stratton, 1953.
- 6) Rapaport, D., Gill, M., & Schafer, R. *Diagnostic psychological testing II*. Chicago : Year Book Publishers, 1946.
- 7) 戸川行男 絵画統覚検査解説, 東京 金子書房 昭 28 (1953), 42—46, 74—75.

——1959. 7. 2. 受稿——

パースナリティ研究のための1つの有効な手段としての

ワルテッグ描画テスト (WZT)*

——警察庁科学警察研究所 渥 美 玲 子**——

序

ワルテッグ描画テスト (Wartegg-Zeichen-Test WZT) という名は、我が国ではまだ Rorschach や TAT ほどには知られていないが、ヨーロッパは、少なくともドイツ、スイス両国においては、今日、Rorschach や TAT 等と並んでかなり普及しているプロジェクトブ・テクニークの1つとなっている。

本研究においてはこの WZT のパースナリティ研究の1補助としての性格を、1神経症患者の連続した2枚の WZT 結果の紹介を通して示し、パースナリティ・テストとしての本テストの有効性を我が国の被験者についても検証していくための1つの出発点となることを目的としている。

テスト結果は種々な利点からここでは全面的に M. Kinget(3) の方法によって評価されている。この概略については以下に簡単に述べておく。

評 価 方 法

M. Kinget によれば、テストの結果、すなわち描画は3つの異なった観点から評価される。1) 与えられている刺激図形との関係、2) 描画の内容、3) 描画ぶり (描

き方) とからである。第1の観点は彼女の評価方法においては主要な部分をなすものではないが、ここでは各々の刺激図形がある象徴的な意味を持っていて、それがそれぞれ個人のある精神機能に対応すると想定されている。この詳細については M. Renner(6), Lossen, & Schott (4) 等の文献に述べられている。要するにこの観点からの評価の中心は、被験者がこの刺激図形の象徴的な意味をどのように知覚し、またどのように表現しているかということなのである。Kinget の評価の主要な部分を構成するのは、第2と第3の観点から導き出された基準で、これはそれぞれ Table 1, Table 2 に示されている。個々の基準の意味するところをでき得るかぎり明確にしておくことは必要なことであるが、ここでは紙面の関係で省略する。またこれらの基準の中でも特にしるし(*)を附したものは、まだその意味が一義的に明らかにされていない。今後の研究によってその基準としての妥当性

Table 1 描画内容の分類

なぐり描き			
抽 象 画		対称的装飾抽象画, 非対称的装飾抽象画, 技術的抽象画	
絵 画	現実的	自然	生物界 (人物, 図式化) 無生物界 (雰囲気)
		物	実用品 (スタイル) 装飾品
	幻想的	空想, 幻想, 象徴	

* Wartegg-Zeichen-Test(WZT) as a Serviceable Tool for Personality Investigation.

** Reiko Atsumi (Scientific Police Research Institute.

Table 2 描画の形態的特徴の分類

形態水準		
(描)線 カバー	圧 力	強い—弱い
	タイプ	直線の一曲線の
陰 影	描き方	連続の一非連続的
		貧弱—豊富, 拡張の一収縮的
構 成	強 さ	濃い—淡い
	質 効 果	
		部分—全体*, 関連—孤立*, 細部描写, 組織化, 反復再現—多様性*, 閉鎖的描画*, 方向づけ, 慎重さ—無造作, 運動*, 独創性—平凡*, 明瞭さ—あいまいさ*, 一貫性—非一貫性*

が確かめられねばならない。

数量的な評価というものは、プロジェクト・テクニックにあっては本質的なものではないが、Kinget の評価方法においてはこの数量的な評価が重要な役目を果している。すなわち個々の描画は Table 1, Table 2 の基準に照らし合わせて、3 点法の基盤において採点される。ある特徴の微弱な表示に対して 1 点が、明らかな表示に対して 2 点が、そして非常に強度な表現に対しては 3 点が与えられるのである。このようにして採点されたテスト結果は次にプロフィールに描かれる。このプロフィールは基本的には類型学的な構想(3)に基づいているが、これによってテストの個人解釈へのいとぐちが開かれる。まず採点された諸特徴は、Table 3 のごとく配分される。

Table 3 ワルテッグのパーソナリティ像を構成している描画の諸特徴

(4 次元)	特 徴	描 画 の 諸 特 徴
感 情	外 拓 的	生物界, 人物, 拡張傾向, 曲線, 無造作
	内 向 的	無生物界, 雰囲気, 図式化, なぐり描き, 対称, 非対象抽象画, 弱い線, 部分, 陰影
想像力	結合的	人物, 装飾品, スタイル, 対象抽象画, 組織化
	創造的	幻想(空想, 幻想, 象徴), 非対象抽象画, 拡張傾向, 濃い陰影, 独創性
知 性	実際の	物, 細部描写
	思索的	技術的抽象画, 組織化
活 動	力動的	生物界, 強い線, 豊かなカバー, 濃い陰影, 方向づけ, 運動
	統制的	真直な線, 強い線, 貧弱なカバー, 収縮傾向, 重複, 閉鎖的描画, 慎重さ

以上のような過程を経て個人の「パーソナリティ・プロフィール」が描かれると、診断は主要な段階、すなわち個別化の段階に入る。この段階では次のような側面からの考察がなされ、テスト結果は統合される。a) 描画時間。b) 刺激図形と描画との関係。c) 描画順序。d) 「パーソナリティ・プロフィール」の分析(構成因子の考察)。e) 採点されなかった諸特徴、その他の特殊因子など。この際、被験者の個人的な基礎的資料(性別、年齢、教育程度、職業等)が考慮されなければならない。

事 例

被験者 女子, 28 才, 高等女学校中退, テスト施行当時無職。

(1) 描画内容 (Fig. 1)

第 1 回目

1. 梅干べんとう 2. ビール壺 3. 遠くの方から手前に旗が並んでいるところ(オリンピックか何かの) 4. おしょうゆの壺 5. カクテル・グラス 6. 家 7. 洋服の柄 8. 父の顔

第 2 回目

1. ブラウス 2. 大小 1 対のお茶碗がおぞんにのっている 3. 旗 4. かすり模様の着物 5. 十字架のネックレス 6. きもの 7. スカート 8. 海のゴムまり

(2) 描画順序

第 1 回目

8. 1. 6. 7. 3. 2. 5. 4.

第 2 回目

8. 3. 2. 1. 7. 6. 5. 4.

(3) 描画時間

第 1 回目——51 分

第 2 回目——67 分

(4) プロフィールの分析 (Fig. 2)

a) 概 観

この被験者の 2 つのプロフィールを一見して明瞭なことは、統御的活動と第 2 回目における実際の知性を除くすべての機能の得点が全般的に低いことである。このような低調なプロフィールは、一般に内的な可能性や変容性の乏しい被験者に現われることが多いので好ましい徴候とは考えられない。この被験者ではこの一般的低調さが活動の統制面の著しい強調を伴っており、抑制あるいは禁止のような強い統制機制、あるいは強迫的な固執傾向のようなものが存在するのではないかという疑いを起こさせるのである。この基本的な傾向については、第 1 回目のプロフィールと第 2 回目のそれとの間に特に著しい変化は認められないが、全般的に第 2 回目のプロフィールの方が第 1 回目に比して好ましい様相を呈している。特に第 2 回目のプロフィールにおいて実際の知性の得点が著しく上昇していることは好ましい変化として注目したい。また第 1 回目では感情は内向的な傾向を

第1回目

第2回目

Fig. 1.

示していたが、第2回目においてこれが外拡的な感情と同レベルになり活動もいづらか上昇している。

b) 個々の機能の分析

感情 まず生物界、無生物界、人物、雰囲気、などのいわゆる自然という絵画範疇に属している基準の得点がほとんど欠けていることが注意される。第1回ではそれでも微弱ながらも被験者が自ら「父の顔」と題した第

8図形の得点が生物界と人物の得点を構成しているが、第2回目ではこれも全く欠けている。さらに無生物界と雰囲気の得点は両回とも欠如している。これらの得点の欠如は診断的にネガティブな意味をもつものであると一般にされているが、この被験者の場合もその社会生活における適応に関して何か問題があるのではないかという暗示を与える。次に感情の内面的側面の構成に目を向け

Fig. 2. Profile

ると、2回とも弱い線の得点がこの機能の全得点の半分以上を占めていることが明らかにされる。また、少ないながらも陰影の得点が存している。これらの点からこの被験者について次のような想定が可能ではないと思われる。すなわち、弱い線が個人の知的情緒的な構えをある程度表示する描画特徴であることから、この被験者のこの機能の構成において自然と呼ばれる描画範疇に属する基準の得点が全く欠けていても、これのみを以て、この被験者は情緒的に暖みに欠け、感受性も低いと考えることは充分でないと思われる。また少なくとも第1回目においては、生物界の得点が存していることから、これのみを以て、この被験者は有機的な世界に全く興味・関心を持って居らず、またそれとの接触も非常に稀薄であると想定することも同様に正当ではないと考えられる。この感受性に欠けるという想定が正しくないという点は、わずかなりとも存在している淡い陰影の得点によっても裏づけられる。とすると、この被験者の情緒性は何らかの形で強い統制を受けているのではないかということが次の可能性として考えられる。このことは第1回目に対象的抽象画が現われている点、また弱い線が時に服従傾向や抑制なども表わしているという点、および淡い陰影が情緒的葛藤や障碍の状態をも意味することがあるという点などから支持されるのである。この被験者の情緒性が統制による貧困さを示しているという想定は更にプロフィールを一見して明らかな統制機能の著しい強調との関連からも充分にあとづけられる。

想像力 この機能の2つの側面に対するこの被験者の重点は2回ともまったく結合的側面に置かれている。このことはこの被験者の想像力が全く知的な色合いのものであることを示している。第2回目では装飾品とスタイルの得点が現われているが、このうちスタイルはことに

知性と情緒のバランスをとる役目を持っているので、これの出現は好ましいものと考えられる。

知性 2つのプロフィールが著しい変化を示しているのはこの機能の実際的な側面においてである。この点、すなわち第2回目のプロフィールが、この機能において著しく上昇している点を実際的な事がらを処理していく能力の上昇を示すもので、一応好ましいものと考えられる。しかし両プロフィールを通して組織化の得点が低く、ほとんどすべての描画が、第1回目も、

第2回目も物に解決されているという事実はやはり体験、ことに情緒的体験の貧困さを物語るものである。この事実の持っているネガティブな意味はことにこの被験者のものごとに対する厳格な (rigid) 態度の表われとも解されるのである。

活動 この被験者の活動機能はその力動面の低調さと統制面の著しい発達とによって特徴づけられている。この傾向は第2回目においては第1回目よりいくらか緩いではある。第1回目における強い線、抗張傾向、濃い陰影等の得点の完全なる欠如はこの被験者における強い生命力の欠乏を容易に想定させるものであるが、他方この機能の統制面の構成要素のすべての得点、ことに比較的に多い直線と貧弱なカバーなどの描画特徴の持っているネガティブな意味が強められるのである。2回目においてわずかずつでも、強い線、豊富なカバーなどの得点が表われていることは、この被験者の活動における自発性の回復と見られる。他方統制面では、第一義的に好ましくない意味をもっている貧弱なカバー、収縮傾向、反復などの得点が消失している。しかし直線の得点が変わっていないことと慎重さの得点が増加していることは、やはりこの被験者における統制の強さを物語っている。この被験者にとってはこの統制が小心さ (meticulousness) の傾向を帯びたものであることが次の事実から想定される。すなわち本テストにおいて2度ともこの被験者は描画にレツテルづけを行なっている。その度合は1回目よりも (図形 1, 2, 5, 7, 8) 2回目 (図形 3, 8) ではずっと減少している。

(5) 採点されなかった諸特徴その他の考察

この被験者の描画において、第1に注意をひく点は2枚の描画のいずれにも再現が見られることである。第1回目では「壘」の主題が図形 2 と 4 に、第2回目では

「着物」の主題が図形4と6とに2度ずつ描かれている。これは単にこの被験者の体験の狭さを意味するだけではなく、固執への傾向を表わしているものと思われる。しかもこの被験者にとっては、これが表現的な内容の描画において起っている、強迫的な性格を帯びた固執傾向が想定される。第2の特徴はこの被験者の描画における静的な性格で2回とも運動の得点は零になっている。これは再びこの被験者のパースナリティの硬さ (rigidity) を表示するものと思われる。上述の描画として完成されたものからのみ指摘された諸点はこの被験者の本テストに対する態度や、テスト中の行動の観察によってさらに裏づけられる。この被験者はある図形を描き始めるかに見えて何度も思いとどまり、描き始めてからも消して描き直すことが多く、第1回目では、隠して描こうとする態度が見られ、「何を描いてもよい」との指示にもかかわらず、「へんなものを描いてもよいかどうか」等々描画中に確かめたり、非常に小さな慎重な態度を終始示していた。

(6) 刺激図形と描画との関係

第1回目の描画においてもまた第2回目においても、情緒性に訴えるとされる刺激図形2は「壺」とか「茶碗」などの非有機的なものに解決されて居り、これは既述のこの被験者の統制された情緒性という想定を裏づけている。刺激図形3では第1回目よりも第2回目に発展が見られ、その意味でも後者の方がより健全な様相を呈している。図形5はいずれもその刺激特質を適正に把握してはいないが、この種の描画はよく描かれるので特に問題であるとは考えられない。最後に1つの興味をひくことは、第1回の描画において図形8に「父の顔」が描かれていることである。この描画はここに記載されている描画順序では第1番目となっているが、実際にはこの被験者はこの前に図形4に「母の顔」を描いている。この描画は後で被験者が刺激図形との関係を意識して「おかしいから描き直す」と言って消してしまったのである。これらの刺激図形の持っている象徴的な意味を理解することは簡単なことではなく、深層心理学的な豊かな洞察をもってしてはじめてその解釈は可能となるものであるから、ここで何らかの特殊な意味をこれらの描画に見出そうとすることはきわめて困難なことでまた不可能なことであるが、はじめに図形4に「母の顔」が描かれ、続いて「父の顔」が描かれたということ、そしてこの「父の顔」が男らしい厳しさよりもむしろ女性的な優しさを示している点は興味あることである。

(7) 描画時間について

描画時間は2度とも平均よりかなり長くなっている。これは描画の内容およびその程度からいって明らかに認容できる範囲以上であって、この被験者の神経症的な傾向を表わすものと考えられる。

ここに紹介した被験者は井之頭病院精神科の外来患者で、数ヶ月にわたって心理療法を受けていた。本テストは他のいくつかの心理テストと並んでこの心理療法のはじめられる前に第1回目が施行され、それよりも約3ヶ月後にその第2回目が試みられた。心理療法がはじめられてから3ヶ月後の第2回目のテストと最初のものとの間には、さして大きな相違はみられないが、これはこの時期にはまだ心理療法の効果も明瞭でないという事実を単に反映しているものと考えられる。

この被験者の問題点は一口に言って非常に抑制的であること、そしてそれらの中心が父親との関係にあること、心理療法の結果から明らかにされているが、同時にまた、年齢不相応な子供っぽさ、未成熟さが、その話しぶり、態度の内に見られる。第2回目のテストからおおよそ2ヶ月ほどしてからこの被験者は心理療法者のすすめに応じて就職して現在に至っている。しかし上述のこの被験者のパースナリティにおける基本的な傾向は完全に消失しているわけではない。再テストにおいては、あるいは興味ある変化が見られるかもしれない。

すでに述べたように、WZT のパースナリティ診断テストとしての妥当性を論ずることは、現在の目的ではない。しかしこの1神経症患者のテスト結果のみからも被験者の適応状態 (人間関係をも含めた)、一般社会生活への適応度や現実界との接触の様式やその度合等、被験者の衝動力と統制力の内的機制——いわゆる力動性——、被験者の知的能力の質とその働き具合などを、かなり特徴的に知ることができるということは興味深い。今後、このようなケース・スタディの方向から、本テストの有効性を検証していくための広汎な研究が必要である。

附記 本研究は国際基督教大学大学院教授会提出修士論文の一部である。

文 献

- 1) Franzen, E. *Testpsychologie*. Frankfurt : Ullstein Taschenbücher-Verlag, 1958.
- 2) Hammer, E. F. *The clinical application of projective drawings*. Illinois : Charles C. Thomas, 1958.
- 3) Kinget, G. M. *The Drawing-completion test*. New York : Grune & Stratton, 1952.
- 4) Lossen, H. & Schott, G. *Gestaltung und Verlaufsdynamik*. Biel, Schweiz : Institut für Psycho-Hygiene, 1952.
- 5) Platter, G. *Test-psychologie*. Zürich : Werner Classen Verlag, 1954.
- 6) Renner, Maria *Der Wartegg-Zeichen-Test*. München : Ernst Reinhardt Verlag, 1958.

——1959. 9. 8. 受稿——